

高大一貫英語教育カリキュラム —樟蔭高等学校の実践を通して—

樟蔭学園英語教育センター コーディネーター 山岡 賢三

1. はじめに

本学園では、英語教育センター（ELTC）が平成21年4月、樟蔭学園の英語教育の一層の充実・発展を目指して設立され、「①英語の中高大一貫教育を実施すること、②英語教育理論と実践研究を深めること、③学生・生徒の英語力の向上に寄与すること、④英語教員の教育力の向上に寄与すること」を目的に活動している。とりわけ、「英語の中高大一貫教育を実施する」ためのカリキュラム開発が重要な課題である。

折しも、本学国際英語学科では、平成23年度より English Language Passport Program (ELPP) がスタートした。このプログラムに準拠し、ELTC コーディネーターが受け持っている高等学校進学コースの2・3年生選択授業で、ELTC 専属の英語ネイティブ・スピーカー（ネイティブ）講師及びネイティブの大学教員とティーム・ティーチングを行い、ELPP への接続をデザインしたカリキュラムで英語教育を進めた。

本稿では、ELTC が「英語の中高大一貫教育を実施すること」という本来の役割を担いつつ、大学のカリキュラムと一貫性のある授業を高校で行うことにより、学習の連続性に配慮した一歩進んだ高大連携の実践を報告するものである。

2. 樟蔭学園高大一貫英語教育カリキュラムによる高校の指導計画

2.1 年間指導案

学年当初、ELTC コーディネーターが大学教員と綿密に話し合い年間計画を立てた。高校で教えているコーディネーターが生徒の様子や学校の内情を知っているため、大学教員との橋渡しとなった。

年間指導計画を作成する際、特に「①4技能の指導をバランスよく入れること、②文科省認定教科書と大学で使う教材（Oxford）を両方活用できるようにすること、③生徒が表現活動できる場を設けること、④ELTCでの学習が自主的にできること、⑤生徒が進んで英語学習ができるようにすること」に配慮した。

2.2 教案

コーディネーターとネイティブ講師が毎回の授業の教案を作成し、授業前に十分話し合った。授業前の準備・打ち合わせは教材作成も含め、毎回1時間以上はかけた。お互い十分な時間がとれないときは、メールでやり取りしながら、共通理解を図った。授業後もお互いに反省点を出し合いながら、自己評価し、次回の授業の改善に生かした。また、その反省を“Comments on Lesson Outcome”にまとめ、次年度の資料として残した。

3. 樟蔭学園高大一貫英語教育カリキュラムによる高校での実践

3.1 「ランゲージ・パスポート」の活用

大学生の学習到達度を記録するポートフォリオ「ランゲージ・パスポート」を元に高校バージョンを作成し、高校生にも使いやすいよう工夫した。

高校バージョン「ランゲージ・パスポート」の内容は「①これまでの英語学習を振り返る。②自分の英語力を自己評価する。③多読(読んだ本の数、ページ数、語数)、ELTCでの学習回数の記録をする。④毎日の英語学習内容を記録する。⑤Can-do listに毎時の項目を記入、自己評価を記録する。⑥学期終了時、学習進捗状況に生徒のコメント、教師のコメントを記入する。⑦ヨーロッパ言語基準表(CEFR)に従って4技能それぞれがA1,A2,B1に到達しているか記録する。⑧英語の資格、テスト結果(英検、GTECなど)を記録する」である。このパスポートを使って、毎日の学習を記録させながら、ポートフォリオとして利用させた。

3.2 日本人英語教師とネイティブとのチーム・ティーチング

優秀なネイティブをELTCが独自に雇用するため、大学教員の協力の下、募集、面接、採用、訓練を実施した。ELPPを十分理解し、訓練されたネイティブが日本人英語教師(ELTCコーディネーター)と綿密な準備を行い、生徒の指導にあたった。

3.3 4技能の統合

教材として使っている“Word Skills”(Oxford)には語彙力を増やすため、listening, speaking, reading, writingの4技能をバランスよく使うレッスンが含まれている。高校ではこの“Word Skills”のBasicを使用した。大学でもBasic(教

養英語)、Intermediate (国際英語)、Advanced (国際英語) と引き続きこの教材を使用するため、高大の連続性が期待できる。

3年生で教科書として使用した“Screenplay”(スクリーンプレイ出版)は映画の題材を使ってスキットやロールプレイなど主にlistening, speakingに適している。また、学期の末に行うプロジェクトでは、4技能を統合したグループ発表や表現活動を行った。

3.4 多読 (Extensive Reading)

特にreadingは多読(Extensive Reading)を行った。“Foundations Reading Library”(THOMSON)レベル1～7(各レベル6冊)42冊3セットを揃え、2年選択クラスでは、レベル2(1冊約700語、中2程度)から、3年選択ではレベル4(1冊約1400語、中3～高1程度)から2週間に1冊のペースで読ませた。15分間黙読させ(早く読めた生徒には別の本を与えた)、読み終わった後、ペアの相手に本の内容を日本語で説明させた。ELTCで、読み終わった本のタイトルを記録するリストにシールを貼らせると、自主的に本を読む生徒が増えた。

3.5 タスク

“Word Skills”(Oxford)のCan-doリストに基づき、課題(タスク)を達成するため「使いながら学ぶ」授業を展開した。また、プロジェクト学習では、“Projects”(Scholastic)を使って、創造的な課題を与え、自分たちが創造したものを英語で表現させる活動を行った。例えば、1学期に実施した“Design a new outfit”では、自分たちのオリジナルなファッションを考えさせ、生徒の前で発表させた。2学期に“Make a band”や3学期に“A New Theme Park”のプロジェクトも行った。

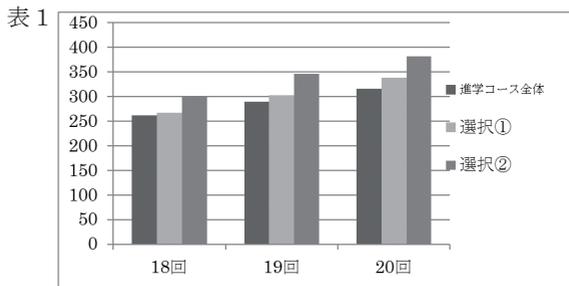
3.6 学習支援

授業以外にも、英語に触れる機会を増やすため、ELTCで学習させる“ELTC Study”の時間を月に1回のペースで設けた。自主的にELTCの施設・設備を使い、“Touchstone”(Cambridge)というDVD教材を見て、内容について答えるという課題を与えた。生徒は昼休みの時間や放課後ELTCにやってきて、課題をこなす中で、ELTCにある他の英語学習にも興味を持ち、フリー

トークや映画などで英語に触れる生徒も増えた。

4. GTEC スコアによる成績比較

第18回(H22.11.29)、第19回(H23.6.27)、第20回(H23.11.24)のGTEC(Benesse Corporationによる英語力を絶対評価で測るテスト)の2年生のスコアを比較し、樟蔭学園高大一貫英語教育カリキュラムによる授業の効果について分析する。



第18回と第20回を比較すると、トータル得点が進学コース全体では54点、選択①では71点、選択②では83点伸びた(表1参照)。Readingは進学コース全体が30点に対し、選択①では32点、選択②では38点、Listeningは進学コース全体が20点に対し、選択①②とも31点、Writingは進学コース全体が4点に対し、選択①では8点、選択②では14点伸びた。このことから、樟蔭学園高大一貫英語教育カリキュラムに則って行った選択のクラスでは、Listening, Reading, Writingの英語技能がバランスよく伸び、一定の成果があったと考えられる。

5. まとめ

大学の財産(施設、教員、カリキュラム、教材など)を高校で有効に使うことは、本学園にとって有意義なことである。大学独自のカリキュラムに触れ、本大学またはELTCのネイティブに出会った高校生は、本大学に魅力を感じるに違いない。そのことが本大学の進学率向上につながる信じ。本年度はELTCコーディネーターが受け持っている高等学校進学コースの選択授業からスタートしたが、高校教員との連携を深め、進学コースの英語教育と大学のカリキュラムとの連携を図りたい。